

実践報告 4

英語表現Ⅱにおける即興議論の指導と評価

一言語活動の「活動の観察」による評価

愛知県立豊田西高等学校 教諭 今田 祐之

1 実践のねらい

本校の全日制課程は各学年8～9学級の普通科で、「躬行実践」(自ら求めて自ら学ぶ)の校訓の下、教育目標を「人間として立派であれ」と定め、自己の能力を最大に伸ばすとともに、他者の幸福のために尽力できるリーダーの育成を目指している。ほぼ全ての生徒が4年制国公立大学への進学を志望しており、その実現のための手厚い進路指導を行っている。また、平成25年度には文部科学省より「スーパーサイエンスハイスクール」の指定を受け、理数系教育及びグローバル人材の育成に力を注いでいる。

(1) 生徒の学びの現状

学びに前向きで活発な生徒が多い。積極的にペア・ワークや自己表現活動に取り組むが、英語による表現力はまだ不足している。さまざまな活動を通じて、自己表現をするための英語力を伸ばしていく必要がある。

(2) 指導と評価における課題

授業ではさまざまな言語活動を行っているが、その場限りのものとなってしまうことが多く、生徒のパフォーマンスを正確に評価してその結果をフィードバックし、次の学習につなげるというサイクルが出来上がっていない。目標とする力が身に付いたか、身に付いていなければ何をどのように改善すべきかをきちんと示すことができるような「指導と評価の一体化」を実現させる必要がある。

(3) 身に付けさせたい力

グローバル社会の進展によって、英語を用いて論理的に意見を主張したり、議論したりしながら、問題を解決する能力は、今後ますます求められるようになる。

本実践では、特に単元の冒頭で行うペア・ワークに焦点を当て、生徒が英語で論理的に議論する力を育成する指導と評価の在り方を探っていく。

2 実践の計画

(1) 学習指導計画

ア 言語活動の工夫

授業の導入として、スマートフォンの功罪について、即興で議論する活動を設けた。この実践における「即興議論」とは、台本などを用いずに、互いに相手の意見に対して反論しながら、自分の意見を述べ合う議論のことである。しかし、いきなりテーマを与えて「さあ話し合いなさい」と切り出してしまっただけでは、生徒はアイデアをまとめることと、英語での表現方法を考えることを同時に行わなければならないとなり、負担が大きい。そこで、事前にテーマを与え、スマートフォンのよい点・悪い点を考え、英語で表現する方法も調べてくるという課題を課した。こうすることで、相手との議論に集

中しやすい環境を整えた。

イ ワークシートの工夫

家庭学習から授業中の言語活動に至るまでの一連の内容を盛り込んだワークシート【巻末資料】を作成した。例えば、スマートフォンのよい点・悪い点を事前に調べて記入する欄や、議論の過程における相手の意見をメモする欄を設けたりしている。また、議論を円滑に進めることができるように、議論の手順もワークシートに明示している。

(2) 評価計画（活動の観察・ルーブリック）

「スマートフォンの功罪について、即興で議論できる」（外国語表現の能力）と「ペア・ワークにおいて互いに協力しながら会話を続けることができる」（コミュニケーションへの関心・意欲・態度）の2点について、ルーブリック【資料1】に基づき、授業中の活動を観察して評価する。外国語表現の能力をより重点的に評価したいと考え、配点を高めに設定してある。生徒には、事前学習の内容を提示する段階で、議論の様子を評価する旨を伝える。教師は1ペアにつき約2分30秒間議論を聞いて評価する。今回は、1回5分間の議論が計4回行われるので、8ペア16人を評価する。

今回の言語活動においては、回を重ねるごとに生徒のパフォーマンスは向上すると考えられる。特に、新しい表現を学んだ後では、その前と著しい差が生まれることが予想される。そこで、今回の評価は、成績に反映させることはせず、生徒の達成状況を把握することと、生徒にフィードバックを与えることを目的として行う。

【資料1 活動の観察のルーブリック】

観点	評価規準	採点基準（ ）内は点数	Score	Total
外国語表現の能力	スマートフォンの功罪について、即興で議論できる。	A(5): 自分の意見を、理由を含めて効果的に主張している。また、相手の意見を踏まえて自分の意見を伝えることができる。 B(3): 相手の意見を踏まえて自分の意見を伝えることができ、議論が成り立っている。 C(1): 相手の意見を踏まえて自分の意見を伝えることに難があり、議論がうまく成り立っていない。	/5	
コミュニケーションへの関心・意欲・態度	ペア・ワークにおいて互いに協力しながら会話を続けることができる。	A(3): アイコンタクトや音量に工夫を凝らしたり、相手が言葉に詰まったときに援助するなど、協力して話し合いを進めている。 B(2): アイコンタクト、音量は適切であり、コミュニケーションを続けようと努力している。 C(1): アイコンタクト、音量が十分ではなく、沈黙の時間が長いなど、コミュニケーションを続けようと努力していない。	/3	/8

(3) 単元構想

ア 使用教科書・単元名

Departure English Expression II (大修館)
Lesson 7 Mobile Devices

イ 単元の目標と言語活動

【単元の目標】

情報化社会に関する表現を学び、関連するテーマについて自分の意見を表現することができる。

【言語活動】

- ・スマートフォンの功罪について、即興で議論する。
- ・連絡方法として、メールと電話のどちらがよいかについて、論理的な文章を書き、発表する。

ウ 単元のCAN-DO（4技能ごとの学習到達目標の設定）

話すこと		書くこと		聞くこと		読むこと	
学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法	学習到達目標	評価方法
・スマートフォンの功罪について、即興で議論することができる。 ・連絡方法として、メールと電話のどちらがよいかについて、発表することができる。	・活動の観察 ・発表	・連絡方法として、メールと電話のどちらがよいかについて、論理的な文章を書くことができる。	・エッセイライティング	（本単元では設定しない）		（本単元では設定しない）	

エ 単元の評価規準（4観点ごとの評価規準の設定）

評価の観点	コミュニケーションへの関心・意欲・態度	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語や文化についての知識・理解
評価規準	①ペア・ワークにおいて互いに協力しながら会話を続けている。	①スマートフォンの功罪について、即興で議論することができる。 ②連絡方法として、メールと電話のどちらがよいかについて、論理的な文章を書き、発表することができる。	（本単元では設定しない）	①論理的な文章の書き方を理解している。
内容のまとめ	①話すこと	①話すこと ②書くこと、話すこと		①書くこと
評価方法	①活動の観察	①活動の観察 ②エッセイライティング、発表		①定期テスト、ワークシート

オ 指導と評価の計画

時間	ねらい、学習活動、指導上の留意点	評価の観点	評価方法
1	<p>[ねらい] スマートフォンの功罪について、即興で議論する。情報化社会に関する表現及び自分の意見を言う場合に役に立つ表現を学習する。</p> <p>[学習活動]</p> <ol style="list-style-type: none"> 事前学習で調べてきた表現をペアで共有する。 一方がスマートフォンは有用であるとする立場、もう一方がスマートフォンは害の方が大きいとする立場をとり、5分間議論する。（議論①1回目） 終了後、どちらの意見の方がよりpersuasiveだったかを決める。 同じペアで役割を交代して、同じ活動を行う。（議論①2回目） 1回目の議論で言えなかった表現を教師に質問する。 ペアを組み換えて、同じ手順で議論を2回行う。（議論②1, 2回目） 配付されたgood points, bad pointsの模範解答例を読み、自分のプリントにないものを確認し補足する。また、模範解答例以外の表現があれば発表する。 	<p>表現、関心・意・態</p> <p>表現、関心・意・態</p>	<p>活動の観察</p> <p>活動の観察</p>

この後、上記と同様の活動を、ペアを組み換えて再度行った。生徒は、英語で言える表現が増えたこともあり、1回目よりも活発に議論を行っていた。

(2) 評価の実際

ア 活動の観察

議論の様子を観察し、評価を行った。以下に評価の具体例を示す【資料2】。

【資料2 活動の観察の評価例】

「外国語表現の能力」の評価例：生徒①の主張に対する生徒②の応答の評価

生徒①： I think smartphones are very good for us because we can play various kinds of games online wherever we are.

・評価Bの例

生徒②： That's not good. I don't think smartphones are good because some people, especially small children, get into trouble when they play those games too much.

・評価Aの例

生徒②： That may be good for adults, but not for children. I've heard that many children got into trouble because they continued to play games even after they were not free anymore. Smartphones can cause such troubles, so I don't think they are good.

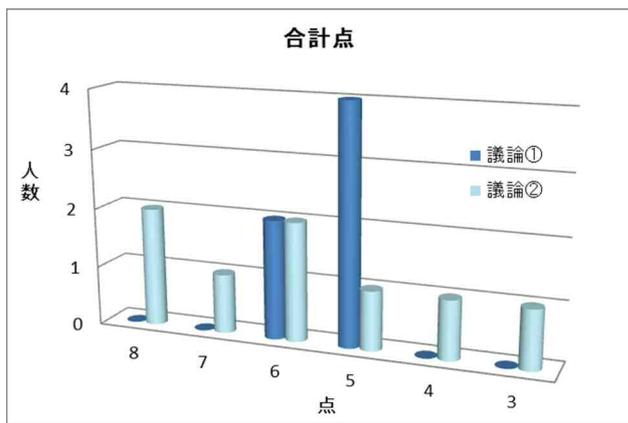
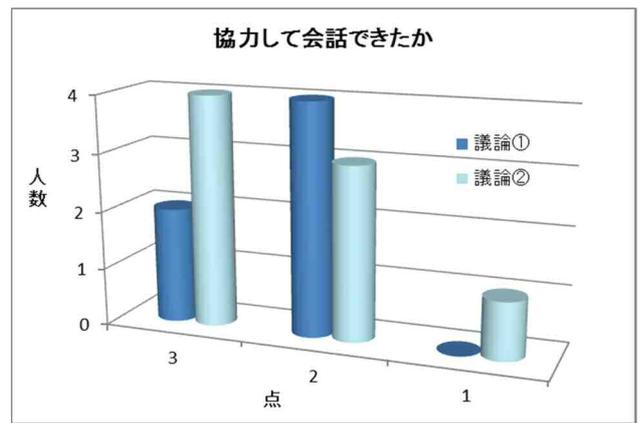
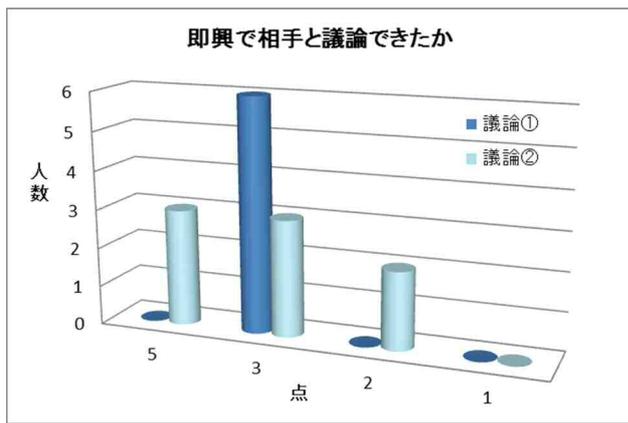
イ 評価結果とその分布

以下に評価の結果と分布を示す【資料3】。議論①の2回目で、議論の最中に言葉がなかなか出でこず、2分30秒間では評価することができないペアがあった。その際、評価ができるまで議論を聞いていたため、予定より2名少ない14名の評価となった。また、「即興で議論」の項目では、「3は与えられないが、1ほど悪くない」生徒がおり、その生徒にはルーブリックにはなかったものの、評点2を与えた。

【資料3 評価の結果と分布】

議論①	即興で議論(5)	協力して会話(3)	合計(8)
生徒A	3	2	5
生徒B	3	2	5
生徒C	3	3	6
生徒D	3	3	6
生徒E	3	2	5
生徒F	3	2	5

議論②	即興で議論(5)	協力して会話(3)	合計(8)
生徒G	5	2	7
生徒H	3	3	6
生徒I	3	2	5
生徒J	3	3	6
生徒K	5	3	8
生徒L	5	3	8
生徒M	2	1	3
生徒N	2	2	4



議論①では、相手の主張に対する直接の反論が出づらかったため、議論②の前に、議論の仕方について例を示した。また、前述のとおり、言えなかった表現を質問する時間を議論①と議論②の間に設けた。このため全体的な印象では、議論②のペアの方が総じて高い評価となった。

今回のような「活動の観察」による評価は、教師にとっても生徒にとっても初めてのことであった。そのため、生徒への事前準備の指示は行ったが、中には十分な準備をしてこなかった生徒もおり、その生徒への評価はかなり低くなってしまった。しかし、このような評価を継続的に行っていけば、生徒に緊張感も生まれ、しっかりと準備をして臨むようになると思われる。

ウ 生徒へのフィードバック

上述のように、十分な事前学習ができなかった生徒の評価は低くなり、そのままの評価を生徒に伝えることはモチベーションの向上にはつながらないと考え、今回は個々の生徒へ評価を提示することを見合わせた。しかし、議論終了後に全体に対して肯定的なコメントを与えるとともに、事前準備の重要性を訴えた。特に、評価が低かった生徒には、次回はしっかりと準備するよう伝えた。

(3) 考察

ア 実践のねらいの達成状況

「指導と評価の一体化」という視点から反省すべき点は、「活動の観察」で生徒の達成状況がある程度把握することができたものの、個々の生徒へのフィードバックを十分に行うことができなかったことである。生徒には活動を評価することは事前に伝えていたが、評価方法や内容、そしてその評価結果がどのように自分に還元されるかまで明確に伝えておく必要があった。それらを伝えないまま、十分なパフォーマンスを示すことができなかった生徒に低い評価を与え、その点数だけを提示したとし

でも、生徒のモチベーションの向上にはつながらない。指導を始める前に、教師がルーブリックを用いた評価の全体像を設定し、その内容を生徒に伝えることの重要性を改めて認識した。

次に生徒の学習状況について述べる。即興で議論する言語活動を単元の冒頭で行うために、事前学習をさせた上で活動に取り組みさせたところ、生徒は回数を重ねるにつれ、議論をうまく進められるようになった。最後の議論②の2回目では、議論の仕方や英語での表現方法も習得していたため、互いの議論がかみ合った形での話し合いが行われていた。

議論①と議論②とで同じ生徒を観察して評価していないため、あくまでも教師の印象ではあるが、議論①で評価をしている際に気付いたことを議論②の前にクラス全体に伝えたことにより、議論②の活動状況が議論①よりも改善され、生徒の成長を感じることができた。

イ 指導手順について

表現方法や議論の進め方を理解すれば、生徒はある程度上手に議論を進められることが分かったので、1回目の議論を始める前にそれらを生徒に指導する方法も考えられる。しかし、それでは生徒の学びが受け身になってしまうという側面もある。1回目の議論で生徒に「うまくいかない」という体験をさせることで、もっとうまく議論するために必要な表現や議論の進め方を学ぼうという意欲が高まり、自ら質問したり注意事項をよく聞いたりするなど、積極的な学習姿勢が生まれてくることが考えられる。そのため、時間はかかるものの、一度「失敗」させる意味でも今回の指導手順は有効であると考えられる。

ウ 評価方法について

今回の評価方法に関しては、以下のような成果と反省点が挙げられる。

(ア) 活動の観察による評価の実用性

ルーブリックを用いて評価を行うことで、生徒の目標達成状況が把握できた。また、その結果から議論を重ねる度に上達する傾向が見られた。ルーブリックをうまく活用すれば、生徒自身が自分の力の向上を具体的に知ることができるため、さらなる学習の動機付けにもなることが分かった。

(イ) ルーブリックについて

表現の能力の項目では、B・C間の差は予想以上に大きかったため、その中間レベルの生徒の評価には苦労した。当初は4と2の評価をすることは想定していなかったが、ちょうど中間に位置すると判断した場合は、それらの評価を与えた。ルーブリックは、初めから完全なものを作成しようとはせず、生徒のパフォーマンスに応じて適宜修正を加えていく方法で作成することがよいと感じた。

(ウ) 総括的評価への反映

1回の活動でなるべく多くの生徒を評価したいと考えて、1組を2分30秒間で評価する計画を立てたが、上述のとおりその時間では評価できないペアもあった。また、何回目の議論を評価するかでその結果は大きく異なるため、ここでの評価を直接成績に反映させることはしなかった。

今回の活動では議論①と②の両方で評価を行ったが、条件面での差がそれほど大きくない議論②の計8名だけの評価を成績に組み込むことも考えられる。40人学級の場合でも同様の活動を5回行えば、全員分の評価をほぼ平等な条件で行うことができる。年間、学期という長期的な計画の下、別の単元でも「活動の観察」による評価を継続し、記録を積み重ねることにより、総括的評価に反映させることは可能と考える。

(エ) 生徒へのフィードバック

後日、別の単元で、環境問題をテーマとした同様の活動と評価を行い、評価結果のフィードバックを行った。そしてそれについてのアンケート調査を実施した。この活動を行った授業は、中学校の先

生方 20 数名に参観していただくものであったため、その先生方にルーブリックを基に生徒の活動を評価していただいた。前回の反省を踏まえて、留意した点は以下のとおりである。

- ・生徒には事前にルーブリックを配付し、それを基に中学校の先生方に評価をしていただくことを伝えた。
- ・事前学習をきちんと行ってくるよう伝えた。また、どのように活動を進めるかも事前に伝えた。
- ・先生方には、1回の活動全体を観察して評価していただいた。
- ・よかった点や改善すべき点を具体的に記入して生徒に渡していただいた。

ルーブリックの内容については、入念な打ち合わせができなかったため、評価結果にはかなりのばらつきが出てしまったが、よかった点や改善すべき点については、具体的に記入していただいた。授業後に行った生徒アンケートの結果は以下のとおりである【資料4】。

質問項目 2, 3 についてはなぜそう思うのか、理由も記入させたところ、2 については、「更に上に行くために必要なことを教えてもらったから」「自分が気付いていない点(抑揚がない, 前を見る etc.)などの指摘があったから」「今まで英語で話すことが苦手だったけれど、褒めていただけたので自信につながったから」など、生徒がアドバイスを前向きに捉えている様子がうかがえた。また、3 については、「評価されることで客観的に見た自分の力が分かるから」「自分で発表するだけだと、どこがどのくらいできたのか分かりにくいから」「緊張感をもって英語を話したいから」など、今後の評価に期待している生徒が多かった。この結果から、大部分の生徒が教師からのフィードバック、特に言葉による具体的なアドバイスを役に立つものであると感じており、今後も英語で発表する力を評価される機会が必要であると考えていることが分かった。

【資料4 生徒アンケート結果】

※回答生徒数：42名			
1 事前学習をきちんとしてから授業に臨むことができた。			
よくできた	24 (57.1%)	あまりできなかった	0 (0%)
まあまあできた	18 (42.9%)	できなかった	0 (0%)
2 先生方からの評価点・コメントは今後の学習に役立った。			
大変役立った	11 (26.2%)	あまり役立たなかった	4 (9.5%)
まあまあ役立った	25 (59.5%)	役立たなかった	0 (0%)
		無回答	2 (4.8%)
3 今回のように、英語で発表する力を評価される機会は必要だと思う。			
大いに思う	20 (47.6%)	あまり思わない	0 (0%)
まあまあ思う	22 (52.4%)	まったく思わない	0 (0%)

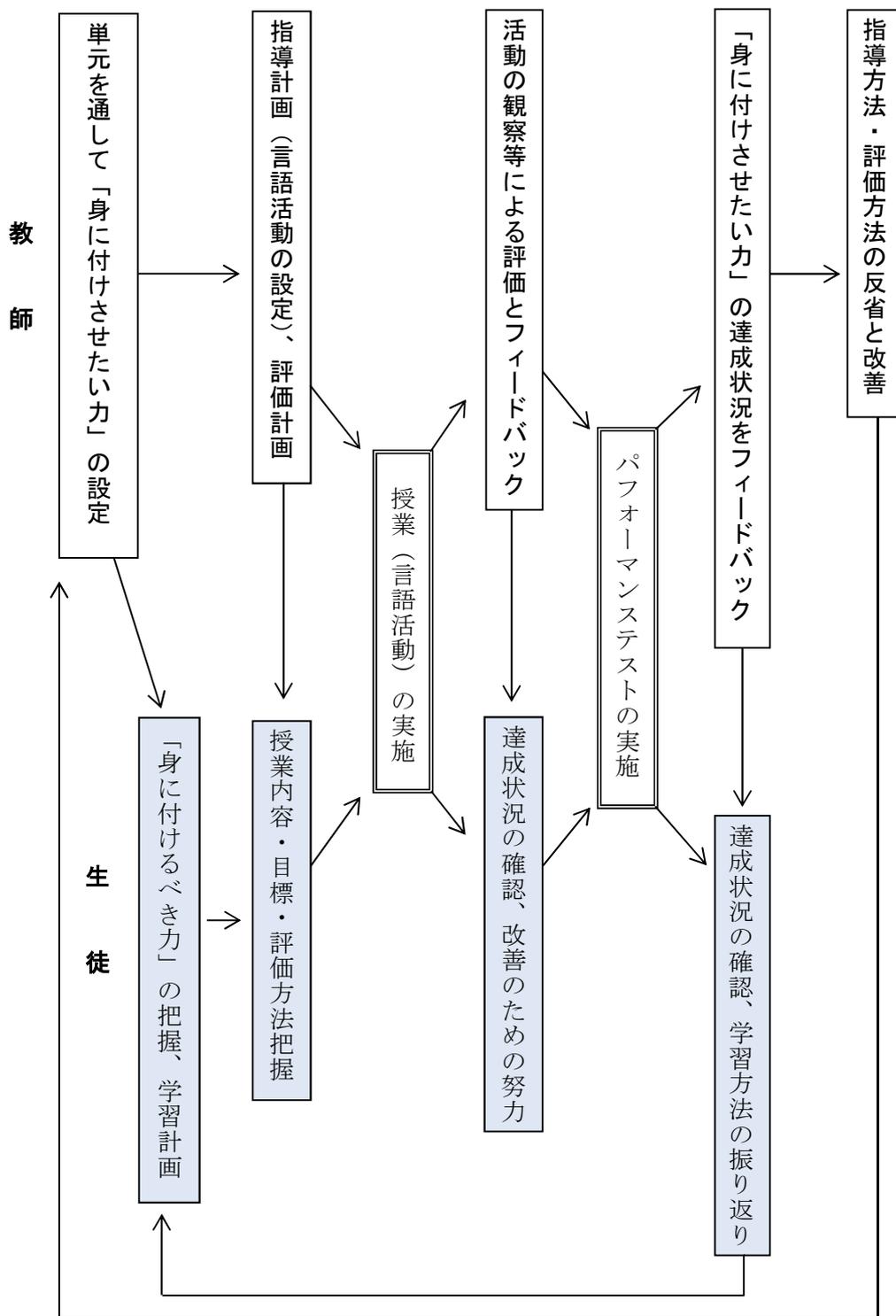
4 今後の課題

本実践を通して、「活動の観察」による評価を行う際の留意点と、その評価をアドバイスとともに生徒にフィードバックすることの有用性を確認できた。また、このような「活動の観察」の評価を積み重ねながら、集大成としてのパフォーマンステストを実施することの必要性を強く感じた。各単元の活動の観察等による評価を通して、改善すべき点を教師から生徒にフィードバックする。生徒は、自分に足りない部分を認識してそれを補うために学習する。そして、パフォーマンステストでその成果を発揮し、更に改善が必要な点があるかを指摘してもらおう。このようなサイクルが出来上がれば、生

徒は英語を用いた言語活動にもっと意欲的に取り組むはずである。

「活動の観察」による評価の特徴は、1回のテストでは測れない力や態度を継続的に見取ることができる点にある。そこで、「活動の観察」とパフォーマンステストを有機的に結びつけた「指導と評価の一体化」が重要になってくる【資料5】。今後は、このようなサイクルを構築できるよう、同僚の英語科教員とともにチームで研究・実践を続けていく。

【資料5 「指導と評価の一体化」のサイクルのイメージ】



参考文献等

- 阿部邦彦他（2010）『高等学校外国語科におけるコミュニケーション能力の育成を目指した単元設計の在り方ー明確な Learning Outcomes を出発点にしてー』山梨県総合教育センター
<<http://www.ypec.ed.jp/center/kenkyukaihatu/22/kiyou/h22kiyoucd/22kiyoupdf/abe.pdf>>
- 石川絵梨子（2013）『パフォーマンス評価シートを使用した実践報告』新潟県CAN-DOプロジェクト <http://www.nipec.nein.ed.jp/sc/gaikokugo/nagaoka_ishikawa.pdf>
- 国立教育政策研究所教育課程研究センター（2012）『評価規準の作成，評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 外国語）～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着に向けて～』国立教育政策研究所
- 佐藤一嘉（2014）『ワーク&評価表ですぐに使える！英語授業を変えるパフォーマンス・テスト高校』明治図書
- 投野由紀夫（2013）『CAN-DOリスト作成・活用 英語到達度指標CEFR-Jガイドブック』大修館書店
- 文部科学省（2009）『高等学校学習指導要領』文部科学省
- 文部科学省（2013）『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』文部科学省
- 横山千晴（2014）『パフォーマンス課題とルーブリックで発信力を問う英語授業～1年英語科 SP2 道案内「留学生に佐賀大学周辺マップを作って紹介しよう」を通して～』
<http://ten.tokyo-shoseki.co.jp/toshosyo/no29/29_jh_p46-63_yokoyama.pdf>

Lesson 7 Mobile Devices ①

<CAN-DOs>

- (配当時間：理型2、5時間)
 ① smart phonesの功罪について、筋道を立てて議論することができる。
 ② 連絡方法としてmailと電話のどちらがいいかについて、論理的に述べることができる。
 ③ 相手の発言を聞いて、内容を理解し、適切に対応することができる。

Task 1: Discussion (即興で話す練習)

～事前学習～ smart phonesの good points, bad points を最低5つずつ英語で書き出してみよう。(もっと書ける人はなるべくたくさん書くこと。)

※教科書の例文などを参考にするとよい。

①good points

.....

②bad points

.....

～ペア活動(授業)～ smart phones について、肯定的立場と否定的立場に分かれて議論する

- 肯定的立場の生徒が、"I think smart phones are very good for us because S+V"で始める。
- 否定的立場の生徒が、"I don't agree with you"と言って、相手が示した理由に反論し、その後、自分の立場を support する理由を述べる。
- 5分間会話を続ける。
- ペアを変え、計3回行う。

<メモ欄>

議論の内容について、必要があれば以下にメモしておくこと。

生徒配付用 解答例 (別刷りで配付)

①good points

.....

②bad points

.....

